

スーパービジョン、ケースカンファレンスの一研究

—スーパーバイザーへのアンケートより—

北 添 紀 子*

(キーワード：スーパービジョン、ケースカンファレンス、スーパーバイザー)

1. はじめに

スーパービジョンは、臨床心理士の訓練において欠かすことができない。スーパービジョンの目的は、スーパーバイザーの教育なのか、担当しているクライアントの治療に対する指導なのかということとはしばしば問題になるといわれている(鏑、滝口, 2001)。Ekstein (1964) は教育、指導、治療のどれかに偏ることがなく、同時にそれを行っていくことの重要性を述べている。理想的にはEksteinの指摘通りかもしれないが、現実として、スーパーバイザーを育てる目的が主であるという意見が多い(河合, 1992, 鏑、滝口, 2001)といわれている。スーパービジョン全般においてそのような意見が主流をしめるならば、大学院教育の中でのスーパービジョンにおいては、なおさら育てるという視点が重視されるであろう。

馬場(鏑、滝口, 2001)はスーパービジョンの定義として第一に1対1のスーパーバイザーとスーパーバイザーの関係であること、第二に一定期間定期的に持続的にスーパービジョン関係を持つこと、第三に毎回のセッションについて丁寧に検討することをあげている。野島(鏑、滝口, 2001)はグループ・スーパービジョンを「①スーパーヴァイザーと固定した数名のスーパーヴァイザーで継続的に毎週行われる。②スーパーヴァイザーは進行中の一事例について、毎週あるいは数週間に一回、一時間以上の指導を受ける。③一事例についての指導が十回以上なされている」と定義している。野島はその定義に該当しないもの(例えば一ヶ月に一回、固定したメンバーで六年間継続し、その間六回の発表を行う)はケース・カンファレンスとよび明確に区別している。そして、グループ・スーパービジョンの効用として、経済性、観察効果、普遍化、希望、多様なダイナミックな相互作用、スーパーバイザーのスーパーバイザー的機能の活用、スーパーバイザーへの依存が強くなりすぎないことをあげている。また、問題点として自分の事例に焦点をあてる時間の少なさ、場合によってはオープンになりにくい、場合によっては過度の競争意識が生じる、場合によって

は劣等感を刺激されるということを指摘している。

筆者は鳴門教育大学に勤務するまで学生実習や研修医の指導を行ったことがあるのみで、心理療法のスーパーバイザーの経験はなかった。スーパーバイザーとしては初心者である。従って、当初は馬場の定義に合う枠組みで個人スーパービジョンを行った。一人一人の時間がかかり、経済的ではないがゆっくりとケースを検討できたと思う。しかし、大学院生の増加とそれに伴って学生も多様化し個人スーパービジョンに疑問を持つようになった。それは時間の経済性に対することよりも、スーパーバイザーによって担当するケース数、ケースの持つ課題に偏りがあり、教育効果の違いが拡大していくように思ったからである。そこで、野島の定義するグループ・スーパービジョンへと変更した。グループ・スーパービジョンをはじめ、一人ひとり違うスーパーバイザーに相対しながら、グループとしての凝集性を高めていくことは極めて困難なことだと気付いた。第一に、グループとしての全体的な目標をどこにおいていけばいいのだろうか。鳴門教育大学の特徴の一つとしての現職教員が多い。それまでに学校内で教育相談としての経験、カウンセラーとしての経験がある大学院生もいる。また、経験年数とカウンセラーとしての成長は必ずしも比例しない。それらの理由により、スーパーバイザーは必ずしも「極めて初心者」ばかりではない。第二に、グループとしての成長が必要である。これは、自分や他者への信頼感、自己受容、自尊感情を高める、他者の感情に敏感になる、新しい自分に気づくなどがグループの中で体験されること(Corey, 1981)である。第三に、筆者とスーパーバイザーがうまく噛みあわなくなっていく危険性もある。これはグループ・スーパービジョンに限ったことではないが、グループになるとそれに気づかない可能性も高くなるのではないだろうか。

倉光、青木(1981)の調査によると面接目標はスーパーバイザー間では差異がみられるのに対しスーパーバイザー間では類似していた。スーパービジョン効果ではスーパーバイザーの人的成長以外の項目ではスーパー

*鳴門教育大学教育臨床講座

バイザーの方が低く評価していた。また、相性はスーパーバイザーの方が強く感じていた。このようにスーパーバイザーとスーパーバイザーではとらえ方に違いがある。

成田 (2000) はスーパービジョンの最後にレビューセッションを行っているという。これは大変有意義だと考える。しかし、評価が関わる関係において、レビューセッションがどこまで有益なのかも疑問がある。そこで今回は無記名自由記述によりスーパーバイザーの考えを調査した。回収率が低く、全体を表していると言いが今後のスーパービジョンを考える一助として報告する。

2. 対象と方法

<対 象>

鳴門教育大学大学院生で臨床心理基礎実習、臨床心理実習の受講者102名(調査時までにはケースを担当した受講者49名、ケースを担当していない受講者53名)のうち、アンケートに同意、回答してくれた37名(回収率36.3%)。このうち調査時までにはケースを担当している回答者は22名(回収率44.9%)、調査時までにはケースを担当していない回答者は15名(回収率28.3%)であった。また、対象者の中には筆者がスーパービジョンを担当している受講者としていない受講者が存在する。

<方 法>

1) 質問紙

スーパービジョン、ケースカンファレンスに関する自由記述の質問紙を行った。調査時点でケースを担当していない受講者は自身のスーパービジョンを体験していない。そこで質問紙の内容はケースを担当した受講者(以後既担当と略記)とケースを担当していない受講者(以後未担当と略記)共通のものと、前者だけに問うものとし、共通の質問は語尾を若干変更した。調査は無記名とし、性別ほかフェースシートはあえて設けなかった。質問項目を以下に示す。

共通項目

問1：スーパービジョンの役割

問2：スーパービジョンに望むこと

問3：ケースカンファレンスから得られていること

問4：ケースカンファレンスに望むこと

既担当のみの項目

問5：スーパービジョンでのケースに関する自分の気持ちの扱い

問6：ケースで困ったときの対応

2) 調査方法

質問紙は臨床心理基礎実習、臨床心理実習の1学期最後の授業の前に対象者に配付し、授業の後記入し回収箱に入れてもらうよう依頼した。なお、依頼の文書には調査の趣旨、調査の取り扱いなどを明記した。

調査期間は、2004年7月28日～2004年8月15日であった。

3) データの処理

データは以下の手続きを取りカテゴリーにわけた。

① 一つの質問の回答に複数の内容を含む場合は内容によってわかる。

② ①の処理を経た回答の内容を、KJ法を参考にカテゴリーにわけた。

データの処理は調査に関与しない臨床心理士に依頼した。また、データ数が少ないため今回は統計処理を行わなかった。

3. 結 果

問1：スーパービジョンの役割(表1)

カテゴリー別では「視点の広がり、軌道修正、ふり返り」が36件、「助言、指導」が24件、「情緒的な支え」が22件であった。

未担当、既担当それぞれの回答者数に対するカテゴリー一件数の割合は、「助言、指導」は既担当が多く、「情緒的な支え」は未担当が多かった。

問2：スーパービジョンに望むこと(表2)

カテゴリー別では、「助言、指導」が25件、「時間、スタイル」など枠組みに関するものが15件、「情緒的な支え」が14件、「内容の充実」が6件、「自分の力量をあげていきたいなど」が3件であった。

未担当、既担当それぞれの回答者数に対するカテゴリー一件数の割合は「助言、指導」、「情緒的な支え」に関しては未担当が多く、「時間、スタイル」は既担当が多かった。

表1 スーパービジョンの役割

問1	未担当 (n = 15)		既担当 (n = 22)		合計 (n = 37)	
	件数(件)	件数 / 15(%)	件数(件)	件数 / 22(%)	件数(件)	件数 / 37(%)
視点の広がり、軌道修正、ふりかえり	14	93.3	22	100.0	36	97.3
助言、指導	8	53.3	16	72.7	24	64.9
情緒的な支え	10	66.7	12	54.5	22	59.5

問3；ケースカンファレンスから得られていること

(表3)

カテゴリー別では「視点の広がり」が19件、「技法などの知識を得る」が18件、「自分と重ねて考える」が16件、「今後のケースに生かす」が13件、「情緒的な支え」が2件、「得られないことがない」が1件であった。

未担当、既担当それぞれの回答者数に対するカテゴリー件数の割合は、「視点の広がり」、「技法などの知識を得る」は未担当が多く、「自分と重ねて考える」は既担当が多かった。

問4；ケースカンファレンスに望むこと (表4)

カテゴリー別に「人数、スタイル」など枠組みに関するものが12件、「活発なディスカッション」が8件、「教員への要求」が7件、「内容の充実」が5件、「情緒的な支え」が5件、「発表者への要求」が5件、「臨む態度」が3件であった。

未担当、既担当それぞれの回答者数に対するカテゴリー件数の割合は、「人数、スタイル」、「活発なディスカッション」、「情緒的な支え」は未担当が多く、「教員への要

求」は既担当が多かった。

問5；スーパービジョンでのケースに関係する自分の気持ちの扱い (表5)

カテゴリー別に「スーパーバイザーに伝える」が14件、「スーパーバイザーに伝え取り扱っている」(前者との違いは伝えたあとについても述べている回答)が9件、「取りあげてもらえないように感じる」が4件、「スーパーバイザーに伝えない」が2件であった。

問6；ケースで困ったときの対応 (表6)

「スーパーバイザーに相談する」が20件、「自分で考える」が12件、「仲間に相談する」が6件であった。

4. 考 察

1) 初心者に対するスーパービジョン

鑪 (1997) はスーパービジョンのレベルとスーパービジョンの関係について、関係性 (患者・クライアント、治療者・カウンセラー、スーパーバイザー)、技法と支えの割合 (臨床的技法と情緒的な支え)、スーパービジョンの

表2 スーパービジョンに望むこと

問2	未担当 (n=15)		既担当 (n=22)		合計 (n=37)	
	件数(件)	件数/15(%)	件数(件)	件数/22(%)	件数(件)	件数/37(%)
助言、指導	14	93.3	11	50.0	25	67.6
時間、スタイル	4	26.7	11	50.0	15	40.5
情緒的な支え	7	46.7	7	31.8	14	37.8
内容の充実	3	20.0	3	13.6	6	16.2
その他 (自分の力量アップなど)	1	6.7	2	9.1	3	8.1

表3 ケースカンファレンスから得られていること

問3	未担当 (n=15)		既担当 (n=22)		合計 (n=37)	
	件数(件)	件数/15(%)	件数(件)	件数/22(%)	件数(件)	件数/37(%)
視点の広がり	9	60.0	10	45.5	19	51.4
技法などの知識を得る	10	66.7	8	36.4	18	48.6
自分と重ねて考える	5	33.3	11	50.0	16	43.2
自分の担当にいかす	5	33.3	8	36.4	13	35.1
情緒的な支え	0	0.0	2	9.1	2	5.4
得られないことがない	0	0.0	1	4.5	1	2.7

表4 ケースカンファレンスに望むこと

問4	未担当 (n=15)		既担当 (n=22)		合計 (n=37)	
	件数(件)	件数/15(%)	件数(件)	件数/22(%)	件数(件)	件数/37(%)
人数、スタイル	6	40.0	6	27.3	12	32.4
活発なディスカッション	4	26.7	4	18.2	8	21.6
教員への要求 (人数、助言内容)	2	13.3	5	22.7	7	18.9
内容の充実	2	13.3	3	13.6	5	13.5
情緒的な支え	3	20.0	2	9.1	5	13.5
発表者への要求	2	13.3	3	13.6	5	13.5
臨む態度	1	6.7	2	9.1	3	8.1
現在のもの	1	6.7	2	9.1	3	8.1

表5 スーパービジョンでのケースに関する自分の気持ちの取り扱い

問5	既担当 (n = 22)	
	件数(件)	件数/22(%)
スーパーバイザーに伝える	14	63.6
スーパーバイザーで取り扱っている	9	40.9
取り上げてもらえないように感じる	4	18.2
スーパーバイザーに伝えない	2	9.1

表6 ケースで困ったときの対応

問6	既担当 (n = 22)	
	件数(件)	件数/22(%)
スーパーバイザー等に相談する	20	90.9
自分で考える	12	54.5
仲間に相談する	6	27.3

次元の三つの視点から図示している。これによると、初心者は技術的にも情緒的にもスーパーバイザーに支えられる関係で、技法と支えの割合は情緒的支えの割合が圧倒的に多い。初心者の段階では治療者、クライアント関係を抱える存在としてスーパーバイザーは機能することになる。

成田 (2002) は初歩的なスーパービジョンでは治療者の不安、緊張を和らげた上で、クライアントの理解、評価にあやまりのないようにしなくてはならないこと、しばしば過剰な心理化に陥りがちであること、患者の体験と治療者の体験は異なること、治療構造の重要性とその設定の仕方についてなどに具体的な助言をしなくてはならないことを述べている。

金沢 (2002) は統合的発達モデルに従いスーパービジョンの方法を「スーパービジョンを構造化して、訓練生に枠組みを与えることにより、訓練生の正常な不安を、訓練生自身が対応できる程度に抑えておくことが必要である。(略) スーパーバイザーからの指示とフィードバックは非常に重要である。また、スーパーバイザーは、訓練生の自信の程度に常に注意を払い、訓練生の自信がまわっていくにつれ、与える指示と構造・枠組みを少しずつ減らしていくことが求められる」とまとめている。

Kaslow (1986) は初期の学習とスーパービジョンのプロセスとして6段階があると述べている。それは第1段階：興奮と予期不安、第2段階：依存と同一化、第3段階：活動と継続的な存在、第4段階：活気と責任的関与、第5段階：アイデンティティと自立、第6段階：落ち着きと仲間意識にわけられるという。第2段階のスーパーバイザーは「プロとしてのアイデンティティの未完成さと仕事を遂行するために積み重ねたスキルの不十分さを反映した自己不信とアンビバレントな感情にたびたび襲われる。スーパーバイザーは初心者の『肯定飢餓』に態度と動作で温かさと受容を伝えて働きかける。(略)

寛容で支持的な専門家はトレーニングの初期の段階にいる学生にとってもっともよいスーパーバイザーとなる」と述べている。

今回の調査でも「スーパービジョンの役割」に対する回答は「視点の広がり、修正、ふり返し」、「指導、助言」、「情緒的な支え」の3カテゴリーにわけられた。カテゴリー件数では「情緒的な支え」は最も低く、スーパーバイザーの意識としては言語的に得られるものをスーパービジョンの役割として認識しているのではないかと考えた。

未担当と既担当では若干違いが認められた。未担当は既担当に比べ「スーパービジョンの役割」でも「スーパービジョンについて望むこと」でも「情緒的な支え」の割合が多い。これは Kaslow の指摘するように興奮と予期不安の段階にいるからではないかと考える。未担当のほとんどが「スーパービジョンについて望むこと」に「助言、指導」をあげているのも予期不安からより確実な支えを必要としていると考えられるのではないかと考えられる。複数の調査で、トレーニーの多くの不満はフィードバックが不十分であることが指摘されている (Neufeldt, 1999) が、これも同様の心理的背景があるのではないだろうか。

2) スーパーバイザーの感情の取り扱い

スーパーバイザーは学生の心理療法より心理療法過程を助ける役割をもつと指摘 (Ekstein, 1964) されている。Neufeldt (1999) はスーパービジョンをカウンセリングと差別化すること、つまりスーパーバイザーはトレーニーの治療関係を避けることやトレーニーをクライアントのようにあつかわないことを指摘している。しかしながら、トレーニーの限界を査定し、自己への気づきを深くクライアントを守るためにはカウンセリング的対応を用いる必要があることも指摘している。Kaslow (1986) もまた、スーパーバイザーはスーパーバイザーの強み弱み、対人関係のスキルや人格様式などを熟知しておかなければならないが、「これらはトレーニーの学習経験を促進し、治療効果を高める点にある」と述べている。

今回の調査で少数ながら「スーパービジョンに望むこと」で教育分析的な介入を期待している回答も認められた。これはもう少しインテンシブなスーパービジョンという意味なのだろうか、それとも言葉通りスーパーバイザーの個人史に立ち入ってという意味なのだろうか。

筆者自身は当大学院生に対して教育分析的な介入ができる能力を備えていない。その理由として、第1はスーパービジョンと、教育分析は別の人物が担当したほうがいいのではないかと考えていること。第2にスーパーバイザーと筆者とは評価や論文指導ほか複数の役割、関係性を保っていること。第3に、教育分析による精神的疲

労感と大学院でのトレーニングが両立するのか判断ができないことがあげられる。

成田 (2000) はスーパーバイズ経験の中でスーパーバイザーが自身の感情や個人史を語る場合があることを述べている。成田は「とくに解釈せずに『そういうことがあったのですか』と聞くにとどめた」という。ごく初歩的なスーパービジョンに関しては「初歩的スーパービジョンでも治療者の感情に目を向けることは必要である。しかしそれを治療者の生活史やパーソナリティなどの個人的要因に立ち入って検討することはしない。治療者の感情は初心者であるということによる無理のない気持ちとして、あるいは患者の問題に由来するものとして取りあげるようにする」と述べている (成田, 2002)。

今回の調査で「スーパービジョンで自分の感情をどのように取り扱っているか」は、「スーパーバイザーに伝える」、「スーパービジョンで取り扱っている」の件数が「取りあげてもらえないように感じる」、「スーパーバイザーに伝えない」よりも多かった。しかし後者の合計が20%を超えている。また、スーパーバイザーに伝えることとスーパーバイザーの感情が収まることとは一致しない。このことは項目をわけて調査する必要があったと考える。また、今後のスーパービジョンにおいてスーパーバイザーがどのように感じているだろうかということに十分に思いを巡らせる必要があると考えている。

3) スーパーバイザーの抵抗

河合は「指導を受けに来た人が嘘をついた場合はどうなるか」ということに関し、「これはたしかに困りますが、一面からいうと、そういう嘘をつくこと自体が訓練になってくる(略)あまりにもひどい失敗をして誰にも言いたくない秘密は、指導者に対してもいわなくていいのではないか。それをいってみることによって意味があるときに、その人は言えるでしょうが、それがいう気が起らないということは、まだその『時』がきていない」と述べている。

Yourman (1996) の調査では、スーパーバイザーの30-40%はうまくいかなかったことを隠すまたは歪曲して伝えようとし、それらはスーパービジョンで避けられないことであると報告している。さらに、不開示や隠そうとすることは、スーパーバイザーの満足度、スーパービジョンで逆転移について話しあうことに関連していると述べている。また、スーパーバイザーの満足度と連関が認められたのは、逆転移について話しあうこと(正の連関)、スーパーバイザーをセラピーのようにあつかうこと(負の連関)であったと報告している。

今回、スーパービジョンで隠したり歪曲して伝えたりしているかという質問項目は設けなかった。しかし、意識的にせよ、無意識的にせよスーパーバイザーの防衛が

働いている。河合の指摘するようにスーパーバイザーをいかに尊重するかは極めて重要である。また、Yourmanが指摘するようにスーパービジョンで正確にセラピーの内容を取り扱っていくためにスーパービジョンで逆転移について十分取り扱っていくことは重要である。スーパービジョンでの不開示、歪曲して伝えていないかという項目はあつかいづらい課題の一つでもあるが、今後の検討課題である。

4) スーパーバイザーに求められるもの

ケースを担当して経験が少ないころはケースを持つというだけで緊張し不安が高くなる。また、スーパーバイザーによってはクライアントとの関係だけでなく、スーパーバイザーとの関係に過敏になっても不思議ではない。おかれている状況によっては努力可能な範囲を超えることもあると思うが、これまでにスーパーバイザーの心構えとして多く指摘されている。

岩崎 (2000) は「バイザーの言うことをただ受け身的に聞いているだけでは不十分で、やはり積極的に内省し、自己開示し、努め、また質問を発し、必要によってはバイザーの考えとは異なる意見をも示す姿勢が望まれる」と延べている。

馬場 (1992) はスーパーバイザーの課題として基礎的研修を十分身につけておくこと、セッションの内容、クライアントとのやり取り、そこで自分が感じたことや考えたことをすべて率直に、スーパーバイザーに伝えること、スーパーバイザーに依存的になりすぎず、面接場面で自由に自発的に動ける状態を保つことをあげている。

今回の調査で「スーパービジョンに望むこと」で自分自身のレベルアップにふれた回答者は8.1%とごくわずかであった。(ただし、この質問項目からはそのような回答を想起しない回答者も多いと思う)また、「困った時に」に「スーパーバイザーに相談する」というカテゴリー件数の回答者数に対する割合が90.9%であるのに対し、「自分で考える」のそれは54.5%であった。これは、スーパーバイザーがスーパーバイザーに依存していると意識している以上に実際は依存しているのではないかと考える。困った時にスーパーバイザーに相談することはいわば当然のことである。しかし、それに加え「自分の考えを確認していく作業をおろそかにすることのないように」ということを伝えていきたい。

5) ケースカンファレンスでの聴き手の役割

皆川 (2003) はケースカンファレンスについて「微視的になりがちなスーパーバイザーとスーパーバイザーにとって、長い時間の流れといった巨視的な理解を得る絶好の機会になる」と述べている。ケースカンファレンスでは発表者、司会者、聴き手とそれぞれの役割故に得ら

れるもの、共通して得られるものがある。実際対象者からは、発表のためにケースをふり返ること、ディスカッションを通して自分の中で明確になっていく部分、ケースカンファレンスの前後に考えることがどれほど有意義なものであるのかといった話をよく聞く。また、筆者自身もしばしば体験する。しかし、今回の調査でその点を明らかにしていくことはできなかった。

藤山 (2003) は、「通常のスーパービジョンにおいてスーパーバイザーはもちろんスーパーバイザーに話しかけている。(略)スーパーバイザーがまだ理解できないだろうと考えられることを語ることは差し控えなければならない」と指摘している。一方で、公開スーパービジョンでは、「スーパーバイザーは聴衆にも語りかけなければならない」と述べている。公開スーパービジョンは、聴衆の存在により、スーパーバイザーと症例提供者に独特の葛藤を生じさせ、その葛藤の中で生産的なものとなることを指摘している (藤山, 2003)。また、藤山はその機能を高めるためにスーパーバイザー、症例提供者、聴衆がどのように取り組むべきかを述べている。その一つに聴衆が知的な仕事をするだけでなく、情緒や空想、とりわけ自発的な気持ちの変化を味わい、単なる傍観者ではなく、関与者となることの重要性を指摘している。

村瀬 (1996) も、カンファレンスが活気を帯びて、生産的な場になるために、聴き手がよい意味での能動性を持って臨むことの大切さを述べている。村瀬は事例報告を聴く視点の置き方として①点→線→面→立体→立体、+アルファとクライアントのイメージを膨らませる②こういうクライアントに相対するとき、治療者としてはどんな点が辛く、難しいのか考えながら治療者の動きを追体験してみる③クライアント-治療者関係が、クライアントと治療者を取り巻く環境、役割にとっての意味を考えると述べている。①②はズームアップの視点であり、③はロングショットの視点であるという。

初心者の中にも、藤山、村瀬が指摘するような能動的な関与者としてケースカンファレンスに臨む姿勢が自然に備わっている場合も少なくないだろう。しかし、今回の調査からは、ケースカンファレンスの役割として最も多いカテゴリーは、未担当では「技法などの知識を得る」であった。未担当はカンファレンスで流れについていくのが精いっぱい、あるいは新しいことを習得することに関心が強いのかもしれない。一方、既担当でケースカンファレンスの役割として最も多いカテゴリーは、「自分と重ねて考える」であった。能動的な関与者としての姿勢はケースを担当することで備わってくるものかもしれない。

未担当者では「ケースカンファレンスに望むこと」として「人数、スタイル」など枠組みに関する回答が多かった。これは教育体制の不備に関する不満とも考えられる。

ディスカッションを活発にするために少人数を望むという回答も目立った。一般的に少人数になれば意見は出やすいと考えがちだが、ケースカンファレンスの場合それだけでは不十分だと思われる。今回の調査から、はじめにケースカンファレンスの聴き手としてのモデルをいくつか提示することも必要なのではないかと考えた。例えば初心者であっても村瀬の視点を持ちながら聴いていこうとすることは可能ではないだろうか。そうすることでより能動的にケースカンファレンスに臨むことができるのではないかと考えられた。

5. おわりに

カウンセリングのプロセスは1対1の関係の中で行っていくものでプロトコルを示すことができない。それゆえにスーパービジョンやケースカンファレンスを積み重ね、実践的なトレーニングを行っていくことが重要である。カウンセリングのプロセスと同じようにスーパービジョンもその関係性の中で変化しそれぞれが違うプロセスである。しかしながら、筆者にとってスーパービジョンについてふり返る機会は少なかつた。今回の調査からスーパービジョンをふり返る必要性と、スーパービジョンやケースカンファレンスの意義をスーパーバイザーとともに話しあっていく機会を節目に織り交ぜていくことの重要性を改めて感じた。そのことがより活気があり有益なスーパービジョンやケースカンファレンスに繋がっていくと考えられた。

謝辞：日ごろスーパービジョンで多くの事を考えさせて頂いているスーパーバイザーの皆様、アンケートに御協力下さいました皆様に心よりお礼を申し上げます。

データの分析に御協力いただきました教育臨床講座篠原茜技術補佐員に深謝いたします。

引用文献

- 1) 馬場禮子：スーパーヴィジョンをめぐる課題。こころの科学，増刊号，臨床心理士入門，1992，28-31.
- 2) Corey, G.: Theory and Practice of Group Counseling. Brooks Cole, 1981, 7-9.
- 3) Ekstein, R., : Supervision of psychotherapy: Is it teaching? Is it administration? Or is it therapy? Research & Practice, 1(3), 1964, 137-138.
- 4) 藤山直樹：精神療法の公開スーパービジョンーその機能を高めることに向けてー。精神科治療学, 18 (4), 2003, 391-395.
- 5) 岩崎徹也：スーパービジョンの役割と方法。精神分析研究, 44 (3), 2000, 266-269.

- 6) 金沢吉展：臨床心理学における臨床心理教育の目標、方法、および今後の課題、精神療法, 28 (4), 2002, 410-417.
- 7) Kaslow, F.W. : Supervision and Training: Models, Dilemmas, and Challenges. The Haworth Press, Inc, 1986.
(岡堂哲雄・平木典子訳編：心理臨床スーパーヴィジョン. 誠信書房, 1990, 3-7, 41-64.
- 8) 河合隼雄：カウンセリングの実際問題. 誠心書房, 1970, 180-198.
- 9) 倉光修, 青木健次：スーパービジョンに関する一研究. 臨床心理事例研究, 第8号, 1981, 201-206.
- 10) 皆川邦直：精神療法研修の一部としてのケースカンファレンス. 精神科治療学, 18(4), 2003, 444-445.
- 11) 村瀬嘉代子：子どもの心に出会うとき心理療法の背景と技法. 金剛出版, 1996, 36-44.
- 12) 成田善弘：スーパービジョンについて—私の経験から—. 精神分析研究, 44 (3), 2000, 250-257.
- 13) 成田善弘：精神科臨床と臨床家教育の経験から. 精神療法, 28 (4), 2002, 443-448.
- 14) Neufeldt, S.A. : Supervision Strategies for the First Practicum. American Counseling Association, 1999.
(中澤次郎監訳：スーパービジョンの技法—カウンセラーの専門性を高めるために. 培風館, 2003, 33-40.
- 15) 鑪幹八郎：スーパービジョンとコンサルテーション. 精神医学, 39 (8), 1997, 871-877.
- 16) 鑪幹八郎, 滝口俊子編：スーパービジョンを考える. 誠信書房, 2001, 14-15, 143-149, 87-95
- 17) Yorman, D.B. : Nondisclosure and Distortion in Psychotherapy Supervision, Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training. 33(4), 1996, 565-575.

A Study of the Supervision and the Case Conference

— Opinions of Supervisees —

Noriko KITAZOE

The purpose of this study was to investigate the supervisees' opinions about the supervision and the case conference. The survey used questionnaires, which subjects described freely.

The opinions about "the role of supervision" were categorized in three groups, which are "to review", "to administrate", and "emotional support". More trainees who didn't take charge in clients considered that "the role of supervision" was "emotional support" than trainees who take charge in clients. Most trainees who didn't take charge in clients thought "the expectation of supervision" was "to administrate". Inexperienced trainees seem to be anxious and worry about counseling. I suppose that they demand firm and verbal support because of anxiety.

Supervisees' behavior if they encounter some difficulties were categorized in three gouges, which are "to consult with their supervisors", "to think myself", and "to consult with their coworkers". In that situation, most trainees thought they would "consult with their supervisors", but about half of supervisees thought that they would "think myself". Less than half of supervisees thought "the role of supervision" was "emotional support". According to these results, it may be that supervisees more depend upon their supervisors than they are conscious of their dependent.

More than half of inexperienced trainees thought "the role of case conference" was "to get new point of view" and "to get new knowledge". On the other hand, more than half of experienced trainees thought it as "to think about not only the presentation case but also oneself". Trainees may be able to attend as active participant thorough experience the relationship of client-therapist. However, we discuss how we do to activate case conference.

According to our study, I think that it is important to review and discuss about our supervision and case conference with our supervisees again.